

小説・ハイデルベルクのジャン・パウル (1929)

(連載第2回)^注

作：ヴァルター・ハーリヒ (1888-1931)

飯塚 公夫 訳

第三章 ゾフィー

フォスとシュレーゲルが下で待っている間、ジャン・パウルは自分の部屋で旅の埃を洗い落とした。ひょっとしたら、その全生涯においてまだかつて、あの午後ほど徹底して自分の身を洗い清めたことはなかったかもしれない。当初は顔と手を一通り洗って済まそうと思っていたが、やがてこの遷延作業の終りが目睫の間に迫ると、上着とシャツを脱いで、腕と上半身をきちんとすすぎ洗いしようと思った。そして水がズボンの中へ流れ込み長靴から溢れ出たときは、これをきっかけにして、やがて裸になってそこに立つことになり、洗浄が必要な新たな箇所を次々と見つけていって、最後にきわめて念入りに身体を拭いたのだったが、それでも気分を一新して部屋から出て行かねばならないであろう瞬間が来ることはわかっていた。傍で見ていれば誰にでも、この一瞬がどンドン間近に迫って来ているようにみえていたわけだが、その分よけいに当の作家には、その一瞬が来てはならないということがはっきりとわかってくるのだった。ジャン・パウルは自分の身をしげしげと眺めた。時間稼ぎの新しい方便を見つけるときにいつもやることだった。自己観察を行った。そしてすでにバンベルクで、カロリーネに着ているように散々言われていたのにトランクにしまいこんでいた青いジャケットを、引っ張り出してとくと吟味した。古い擦り切れた方をこれと引き比べつつ、効果をしかるべく推し量りつつである。しまいには服と下着を全部、椅子と寝椅子に並べていた。身に着けるのは

たかだか数分の業といったところだった。そこで彼は、自分では今さらどうということもないある決意をもって、ベッドに上がって、固くしっかりと敷布団を踏みしめて腰を下ろし、掛布団を引っ張り上げて横になった。この奇妙な出会いについてはまだほとんど考えの整理ができていなかったが、シュレーゲルの存在によってゾフィーとの関係も何がしかの影響を受けるだろうということだけはおぼろげにわかっている、「あいつ」と一緒に通りを歩くかわりにベッドに横になっている方がはるかに大きな慰めになると感じたのだった。一緒に歩くとなると、あいつのことだから、きっと慇懃な動作とともに、右側に身を置いていることだろうと思いつつである。

このときのジャン・パウルの気分を言い表すように言われたら、そのときはもちろん、ベッドの中の、ちょっと見ではけちのつけようのない、彼の寝姿とはほとんど滑稽なくらい全く逆の関係になるくらいの、激しいことばを用いざるをえない。窮余の一策である一つの決意によって、一緒にいることを避けることができたことに、彼は半喜びの状態、その喜びは、楽しげに両足両脚を動かす行為に現れていた。しかし上の方では、啞然・愕然たる状態が優勢を保ち続けていた。キーキー声に気づいて以来、とにかくずっとそうだったのだ。何たる愚か者だったことか！老いたということによって、それでも最悪の事柄は免れているのだなどと思っていたのか。最も恐るべき決着は、やっとまだこれからだというのに。自分は安全圏にあると期していられたのか。取るに足らぬ敵が一人、彼に愕然たる思いをさせないでいてくれたからといって。フリードリヒ・シュレーゲルとの後を引くことのない出会いによって穏やかな気分にしておいて、それからはじめて本物の敵対的生活原理の持ち主を送り込んで彼の行く手を阻もうとするとは、運命は何といたずらなことをやっていたことか！彼は何かびっくりするような出来事が近づいている予感がした。この人物がやって来たとなれば、それ以外にはありえなかった。それに、ゾフィーがそこに関わってくるだろうということはわかっていた。何と嬉しそうに舌なめずりする感じでシュレーゲルはわがいとりの名を口にしていたことか！疑う余地はなかった。態度堂々たるこの老マリオネット人形は、新たな活力をこの若

い娘から吸収しようとしていたのだ。シェイクスピア、ヘルダー、カロリーネ（数奇な生涯を送ったロマン派のミュージック、カロリーネ・シュレーゲル＝シェリング。1763-1809。この名は後でまた出てくる。もちろん前出のジャン・パウルの妻のカロリーネとは別人） にゲーテ、次々とこれらを飲み尽くして泥酔してきた男なのだ。同じことをやろうというのだ。今この女の子を最後のお飾りドレープとしてそうしようとしているのだ。最後まで「美に生きる」というわけだ！

突如、これまでの生活のすべてに、新たな整理整頓が行われた。それも常にこの憎むべき男を中心にしてだ。どんなに人生のすべてが、このシュレーゲルの周りをぐるぐる巡って推移していたか、このことはおよそ見通すことができていたのだ！彼のことをほぼ10年前から忘れていたなんてことが、一体どうしてありえたのか。そうなのだ、忘れていたわけではなかったのだ。気づいてはいなかったにしても、心の底の方では、いつか決定的なときにこのような出会いがあるものとずっと思っていたのだ。まず人生が頂点にまで上り詰めなければならなかったのだ。前年のハイデルベルク滞在によって名声と至福が行き着くところまで駆り立てられねばならなかったのだ。運命の逆転のときのために、かくも悪魔的技法によって準備されていたこの場所で、やがて全面的崩壊が生じるようにというただそれだけのためにだ。おのれの人生がカーブする成り行きを、身にぐさりと来るような仮借なさで見通した。ここにはもはや逃げ道はなかった。

誠実の人フォスがもう何度もドアをノックしていてついに中へ入ってきてしまい、今では作家のベッド際に腰を据えていたが、こちらの方は、けちのつけような自分の寝姿が嬉しくて下の方で足をばたばたさせていたものの、上の方ではその顔に啞然・愕然たる表情が刻まれていた。「フォス君！ハインリヒ君、わが弟よ！」ここで助けとなってくれるのは、腹藏なくものを言うこと以外になかった。君は、彼が私の敵だということを、信じてくれる気はないか。ああ、何としたことか。「私」の敵とはどういうことだ。「まさに」敵なのだ。時代の敵なのだ。敵そのものなのだ！ナポレオンの失脚からこのかた、万事が反対向きに進んでいると、君は気づいていないのか。一体君はこれをどう説明するつもりか。近代が一度も見たことのないような一つの運動が突発す

る。アルミニウス（B. C. 17-A. D. 21. トイトブルクの森の戦いでローマ軍を破ったゲルマンの武将）におけるような英雄的精神、ルターにおけるような精神の開放、千年に一度天上に現れるような名前たちが積み重なって星辰を形成する。ヘルダー、ゲーテ、カント、ハーマン、シラー！世界史上最大の激戦の中で、最も輝かしい勝利がかちとられる。黄金時代が始まったかに見える一が、突如無となる。無となってしまうのだ！ドイツ帝国もない、ドイツ再生もない！なぜだ、なぜなのだ。それはある一人の人間が、諸事件の中心点に立って、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ体をねじることで、全てを間違った方向へ向かわせるからだ！今となっては、諸民族及び諸精神のあの偉大な諸運動は何のためだったのだ。ドイツの中世とギリシア人を呼び起こしてしまったのか。うどん粉病がヨーロッパに降ってきて、全ての若い芽を窒息させるためだったのか。世界中の空から降っているようにみえるまさにあの雨によって。反動だよ、フォスくん！反動がヨーロッパを覆っているのだ！

ある一人の人間が精神世界を全部自分の中に飲み込んでしまえば、また、彼はそれを一來るべき世界の種子として蒔くべく民衆のもとに運んでくれるのではなく、がつつちゅうちゅうが本領の吸血鬼どものところに運んでいき、それを彼らに合うように調べてやり、それはただ単に彼らが勲章や名誉や称号の分配人だからだというに過ぎないのだが—そうすると、フォスくん、ある一人の人間は、どんなにしがたい奴でも、世界を変えることができるのだよ。そいつのイデーというものを、奴らのイデーというものを、とくと御覧じろ！これはヘルダーではないのか、これは自由に酔ったようにして始まったロマン派ではないのか。ただ、いささか捻じ曲げられ、偽ものになってしまっているのだ！自由の突撃縦隊はツヴィングウーリ城塞（シラーの「「ヴィルヘルム」に出でくる」）を新たに築いたのだが、あいつが彼らを指導してそうさせたのだ。現代のクリングゾル（ワーグナーの「「バルジファル」のみならず、中世以来ドイツ文学によく登場する魔術師」）、奴隷状態を「真の」自由だと騙して思わせるあの魔術師のことだ。—

ジャン・パウルはベッド上で上体をすくくと起こした状態になっていたが、最後のことばをものすごい興奮状態で叫ぶように吐き出したため、教授は不安げにことばと手で沈黙を命じた。彼はおのれの抑制行為にとらわれすぎていた

ため、友人のことばの赴く先どこもかしこも直ちにはついでに行くことができず、ただ何か異議を唱えて新たな爆発を引き起こすことのないように努めるばかりだった。最重要事は相変わらず、パウルス家での夕べがなくならないようにすることであるように思われたのだ。彼はジャン・パウルの額から滴り落ちる汗を拭いてやった。「友よ、友よ」と呟きながらであり、ジャン・パウルはそう言っているが、自分にはいまだ全く理解不能な一つの時代意志といったものが、押し寄せてくる不安を覚えながらだった。

この一瞬、シュレーゲルがドア越しに顔を覗かせ、かろうじてタイミングよく、ジャン・パウルが彼の姿を見てベッドに仰向けにバタンと身を横たえて壁の方にプイと向いてしまうさまを目にすることになったのだった。「ご病気なんです」と、フォスは困惑しつつ小声で言った。シュレーゲルはそれには構わずベッドに歩み寄ると、穏やかな説得を試みた。もう時間は過ぎております。パウルス教授がゲストの方々をレセプションにお招きしておられます、ハイデルベルクの半ばが集っておられます。ヘーゲル、シエルファー（フランス・ヨーゼフ、1778-1832。ハイデルベルク大学医学・植物学教授。ハイデルベルク植物園長。宮廷顧問官）、クリュートナー女史（バルバラ・ユリアーネ・フォン・クルーデナーのことだろう。1764-1824。デンマークのロシア大使夫人で作家。文学・宗教・政治等さまざまな局面で登場し、波乱の生涯を送る） —このときジャン・パウルは意に反して嬉しそうな動きをした—、クロイツァー、シュヴァルツ、ティボーでございます。彼はこれらの輝かしい名をほとんど舌鼓を打つようにして列挙し、人物それぞれの重要ぶりを味わい尽くすかのようなようだった。ジャン・パウルは身動きしなかった。さらにシュレーゲルが、ゾフィーの名によって彼を呪縛しようとしたときは、再び壁に向かってプイという動きをしてみせて、もうこれ以上何も耳にしたくないということを示唆した。「今何とおっしゃいました」とシュレーゲルは、慇懃かつにこやかに問いかけた。それから意を解して一札すると、傲然と頭こうべを上げて部屋を出て行った。途方に暮れているフォスには注意を払うことなしにである。

「パウルよ、パウル君よ、君は何てことをしてくれたんだ。」ジャン・パウルは「行ったかな」と再び顔を起こし、部屋からいなくなっていることがわかると、そっとやさしく友の手の方に手を伸ばしてそれを掴んだ。「君たちがいる

ここで、こんなことがあっていいものだろうか。誰がシュレーゲルをここへ呼んだのですか。誰が私にこんな仕打ちをするのですか。」

いかにもですが、一体何人がそれを知りえていたでありませんか、とフォスは問い返した。精神の偉人たちとて、自分自身の利益のためにのみ生きているのだ。後世がやってきてはじめて、ああいった見事なつながりの全てが、意義深いものであれ、制約されたものであれ、明らかとなる。するとまたまた、その名前たちが、とっくの昔から平和的に結束しているということになる。ただある一つの時代共通の証人として。シラーとリヒター（ジギルのごと）とヘルダーリンとシュレーゲルというわけだ。そして敵対や対立はすべて、ただ印刷物上の若干の隔たりに過ぎないとなる。一何人がこの全てをわきまえていられようか、というわけだ。

いかにも、誰がそれをわきまえていられようか。悪いのは自分、ジャン・パウルののだ。なにしろ自分は、最後の言葉をまだ発していなかったのだから。今ここハイデルベルクで自分は、最後の小説を、今こそはじめてすべてを解き明かすそんな締めくくりとなる小説を書き始めるつもりでいた。フォスは、前年自分が説明して聞かせた、構想中だった『紙凧』の中の薬屋ニコラウス・マルクグラーフの物語を覚えているだろうか。

ほんの少ししか当時は自分自身まだこの構想の規模というものを予感してはいなかった。やっとこの数ヶ月の間にそれが見えてきていたのだ。いや実のところ、やっと完全明瞭な形でそうやってきたのは、フランクフルトでフリードリヒ・シュレーゲル、そう兄の方だと思ってしまったあの男と語り合ったあとのことだった。もっとも、根本のところでは全部もう自分には明白なものとなっていながら寝かせたままにしておいたのではあるけれども。自分がいかに世界の歴史の激変に、その小説において寄り添ってきたか、このことは理解されていなかっただろうか。『ジーベンケース』では、第三身分の苦悩を描き、『ヘスペルス』では、パリの革命の鐘を鳴り響かせ、『ティターン』では、ドイツの支配者を探し求めたのだった。今現在まだやり残されていることは、神聖同盟時代の小説を書くことであり、『薬屋マルクグラーフ』（最後の未完の長編【註】）

で、それをやるつもりだったのだ。自分以外の何人^{なんびと}に今まだそれを描く力があるだろう。自分は今このときまで宇宙樹（『北欧神話』のユグドラシルの別名。宇宙を支え、根と枝）（は天界・地界・冥界を覆うという常緑のとねりこの大木）を揺さぶり動かしてきていたのではなかったか。ヘルダーが永眠してからというもの、時代感覚というものがわかっているのは自分ただひとりではないのか。自分はすべての成長を見てきた。18世紀の人類の理想のときから、若きロマン派へ、そして、時代感覚を無感覚^{ナンセンス}へと逆転させたシュレーゲル兄弟というあの老いたロマン派に至るまでを。自分ひとりが時代の断絶に気づいていたのだ。我らがヘルダーは、このようなことをひょっとしたら望んでいたのだろうか。そのイデーを彼らは行商して歩いてくれているのだから。その名を挙げることなしに、これはもちろんである。「言っておくがフォス君、このロマン派は世界史上最大のまやかしだよ。自由の夢を神聖同盟の精神に逆転させたのだ。あのシュレーゲル、君たちのアウグルト・ヴィルヘルム・シュレーゲルがそれをやったのだよ！」

かくなる上は教授にとってはもちろん、巨匠の新しい小説の構想について詳細に聞かせてもらうことは、理の当然だった。「で、神聖同盟の小説を書くつもりなの」と、感激して声を大にした。「君のニコラウス・マルクグラーフの話がそれになるというの。」

しかしジャン・パウルは頭^{こうべ}を横に振った。誰も神聖同盟の小説を書くことはないだろう。自分のエネルギーは尽きている。自分は今まではそうしたいと思っていた。しかしシュレーゲルとの出会いが自分のエネルギーを奪ってしまった。自分は今では、自分に関してもどんなことに関しても承知している。自分は岐路に立つ最後の人間なのだ。ここから各人の意見は分かれるのであり、そのことは阻止できないことだ。新しい教権制度^{ヒエラルヒー}を望まないものは、これからは反逆者とならざるをえず、それはひょっとしたら一世紀続くかもしれない、いやひょっとしたらもっと長くなるかもしれない。自分にはそんなことはもはやできない。もはや何もできない。こちらも駄目、あちらも駄目、というわけだ。自分の中では18世紀から新しい時代へ至る橋が崩壊しつつある。「もはや人間というものは存在しなくなるのだよ、フォスくん、この先ずっと、

ずっと！」

ジャン・パウルに対する教授の真率な愛情を疑ってはならない。とはいえ、これは巨匠の新作の話ではないとわかった瞬間から、彼の興味が薄れていったということは言うておかなければなるまいが。彼は、再び沈んだ気持で、台無しになってしまったパウルス家での夕べのことを考えていた。もちろん、一人の天才が考えをめぐらしているその世界を窺い見ることは彼にとって大いに意義あることであったに違いなかったにしてもだ。こんなときでなかったら、まだ何時間でもこの偉大な友人のことに聞き入っていたことだろう。なにせこんな大事なことを伝えるに値する人間と見てくれていたのだ。しかしこの状況からこの晩の計画にすんなりと入って行けるようにはとうていみえなかった。パウルス家でフライパンのローストがじゅうじゅうと音を立てていても、それは無駄なこととなり、蠟燭がきらめく光を投げかけていても、実は何の役にも立ってえず、乾杯の辞を述べるにも、それが出てくるべき胸の中へすごととまた戻っていく始末なのだった。この唯一の主賓が、ベッドに横たわりパイと壁の方に向けてしまい、病気で行けないと伝える気はさらさらしないようなのだ。せめて、服が今なお椅子と寝椅子の上にあって、この服をさっと着て近くの住居への短い道のりを思い切って辿っていくことが本来いかに容易なことかということを教授に絶えず思い出させるということがなかったならばよかったのだが。

しかしフォスはほんの薄々でも、ジャン・パウルがこうも全くパーティなんて知るものかという態度を取っているのは何故なのか、その本当の理由に気づいていただろうか。彼がかくも突然ベッドに横になってしまったのは、単にシュレーゲルのせいだけだったのだろうか。いかにも全く別の理由がその背後にあったのであり、それに引き比べれば、シュレーゲルさえもほとんど願ってもないといっていくらいのいい口実に過ぎなかったのだ。ほぼ1週間というものなおもフランクフルトに居続けていたのは何故か。わざわざ、余人ならぬフォスにお迎えとお伴をお願いしたのは何故か。さっさと言えというのであれば、言ってやろう。それはゾフィーとの再会への恐れだったのだ。しかしこの

恐れというものをもっと事細かに説明しろと言われれば、もちろん、どの時点でそれが始まったのかは、ほとんどわからないのだ。パイロイトの自宅食堂のマホガニーの鏡の前に立ったときに、自分は何があってもびくともしない人間だということに対する疑念が浮上していたのだろうか。あるいはひょっとしたら、情熱の大海へこうして新たに漂い出ていくということ、まさにこのことを恐れていたのだろうか。そこでは何でもありだったのであり、シュレーゲルと出会ったことに彼があれほど吃驚して、彼の思いのすべてを根底からかき乱されてしまうということも、シュレーゲルが彼の前に現れたのが、ドアというドアの向こうからゾフィーが彼の前にいつ姿を見せてもおかしくないような、まさにそんなときでなかったならば、決してなかったであろうことだったのだ。

しかしこの段階で一体何が言えようか！さらにもう一皮作家の魂^{こころ}の中に深く踏み込んで行って、この恐れもまたひょっとしたら、彼女とのそういった出会いに対する、名状しがたい憧憬の気持を包み隠すためのものに過ぎなかったのだ、と言えというのだろうか。恋する女性がドアというドアの支柱の陰からいつ出て来てもおかしくないということを本当に恐れていたのだろうか。いやむしろ、めらめらと燃える憧憬の気持に是が非でも物を言わせて、そのことをもうちゃんと願望していたのではないか。邪魔が次々と重なって、あの「6マイルの一步」が繰り返し先延ばしにされても、また今このときベッドに横になってしまったとしても、これらはすべて、そのような突然の出現をまさに無理にでも引き起こしてみせようとする、ひょっとしたらそれはすでに悪辣とっていいくらいの一つの試みだったのではないだろうか。ここでベッドに横になって、急ぎ足の弾んだ足音が部屋に近づいてこないかと窺っていたのではなかったか。それどころか、構想していたがもはや着手敢行されなかったあの小説についての発言、あれはすべてもうすでに、実際のところ本当は、ゾフィーに向けられていたのではなかったか。その中には明らかに言外の声といったものが共鳴していなかっただろうか。君、君だけが、今これからでもまだ、私がこの小説を書くことを可能にしてくれるかもしれないのです、という願いの気持、憧憬の気持がである。フォスはまだたいそう感動してその場に腰

を据えて、作家の手を握ったまま、「友よ、友よ！」と呟き続けていたとはいえ一実のところこの教授は、この状況のすべてにもはや何らなすすべもない状態だった。シュレーゲルとの精神的言い争いはおのれの人格を賭してのものではなかったが、ここにあったのは、すでにして二人の男性が一人の女性を求めての格闘だった。どちらの方が勝っていたといえるだろうか。自分のベッドの中からの作家の前代未聞の叫びの方が、それとも、シュレーゲルの慇懃無礼なやり方の方だろうか。そして彼は、いかなる動機をでっち上げるかはともあれ、まさにそういうやり方で、ゾフィーにこのセンチメンタルなライバルが自分の方に背を向けたことについて語るかもしれなかった。細い手で勲章の緋色の綬を弄びながらだ。

主賓の病の床についてのシュレーゲルの報告がパウルスとその客人たちのもとで引き起こした狼狽ぶりは、実のところすでに我々の想像するところであっただろうか。そしてこの狼狽の真っ只中にいたあの若い娘のことはどうだ。この家の娘としてサービスに努める恰好をしながら、この出来事に関しては、彼女には無関心な傍観者に対する以上の分け前をあてがってくれることなく、嵐が自分の傍らをざわざわと通り過ぎて行く感じがしていたのだ。我々には、そのときまで、恋する殿方が入ってくることを、今いるすべての人たちのほるか上方に目をやって、一瞬ごとに心震わせつつ待ち受けていた彼女が、今やシュレーゲルの前に立って、彼の話にあまたの質問をさしはさんでいるさまが見えるだろうか。そしてついに、ここにあるのは不可解な敵対関係なのに、そんなところで自分は、この勲章で飾り立てた有名人の友情と敬意を利用して、恋する殿方の前で自分をもっと輝かしく光る存在に見せることができるようにと望んでいたのだということに突然気づいたさまが見えるだろうか。彼女は、偉大な両人の出会いによってこの先数週間がまるごと、すべての希望の真っ只中を貫き走るような亀裂を被ったとわかって驚愕したのだろうか。そして眼中にあったのは、自分が今やあの恐れていた、かくも多くの見ず知らずの人々の目に晒された中での最初の出会いを免れえていたという、この唯一の成果だけだったのだろうか。はや数日前から、この偶像化した人物に、彼が集まりの席

へ足を踏み入れる前に、どこかで二人だけで出会って彼の首にぶら下がり、彼の手紙によって至福の気持になれたことの礼を言うことは、どうしたら可能だろうかと頭を悩ませていた彼女だったが、今は、みんなが彼の態度に驚き呆れている以上、彼の所へ急行する動機が生じ機会が到来したと感じていた。彼の所へ、彼の所へ、と彼女の中で叫ぶ声があった。ものすごく苦しい思いが身内にこみ上げてくる感じがあったにもかかわらずである。なにしろ、シュレーゲルの登場によって、蒼穹の星位にずれが生じて災いを招きそうにみえていたのだから。

彼女の興奮ぶりはたいそうなもので、これまでは今起こっているお手上げ状態とは無縁と思われていた彼女が、ことここに至って、注意を呼び起こさなかりになっていたのだった。彼女はこっそりと抜け出したかった。しかし彼女が考え及んだことといえば、他でもないただ、自分の離脱行為もまた、こういった逃亡行為のもつあらゆる特徴を備えていなければならないのだということ、これのみだった。つまり、ドアの方にためらいがちの視線を投げかけ、人目を忍んでさっと自室に向かい、ショールをまとい、飛ぶように廊下を駆け抜け、階段を駆け下りることからはじまって、下に辿り着くと、誰も後をつけていないかと、息を切らしながら振り返ってみるまでの一連の行為のことだ。彼女の外出は、見知らぬ旅籠に横たわるひよっとしたら案外病気がちかもしれない友人への心配から出た思いやり行為としてであったならば、何と容易にしかるべきものに分類されえていたことだろう。ひよっとしたら、支障が生じた両親の使者としてでもよかったかもしれない。しかし彼女が欲しかったのは、言い逃れではなく、宿命さだめというものだった。恋する殿方の所へ、見くびられながらも積み重ねてきた才能を備えた女性たる彼女に、女の宿命さだめというものを目覚めさせてくれた唯一の男性のところへ、こっそり人目を忍んで行くという行為、これを欲したのだ。急行しつつも、至福感に浸っていたのだ。女であることの、あの胸を締めつけられるような至福感にである。なにしろ、同世代の者たちの中にあっては、半ば驚きの目で見られ、怪訝な思いをさせてしまうような人物になりおおせていたに過ぎなかった彼女なのだ。やっとなにに跪いて身

を捧げるのに適っている男性が現れていたのだが、それをわがものとするのが、今や危殆に瀕しているように彼女には思われていたのだ。

彼女は鏡をもう一瞥した。しかしそれは、外見が整っているかを確認するためではなく、自分が意気揚々たる状態にあることを確認するためだった。それから彼女は駆けた。ゾフィー・パウルスが、学のある教授の娘が、女流画家が、女流音楽家が、小さな女の子のように、こういう状態になれたことの至福感に浸りつつも、恐怖を感じさせるような兆候を思うと、またぞろ不安に駆られながら、もうすっかり闇に沈んだ通りを、「カールスベルク」へ駆けていき、従業員の一人に部屋に案内してもらい、ドアをノックした。もう一度もっと大きくノックした。さらにもっと大きくノックした。するともう彼女は、薄暗い部屋の中の人となっていて、馴染みのフォス教授の姿がおぼろげに見え、ベッドの中に彼が、いとしの君が、わが作家がいることに気づいたのだった。あまりにも突然の出来事だった。まだほんの今の今までは、蠟燭のきらめく輝きの中であって、わが家・わが地位・わが人格といった、曇りなき生活環境に包み守られていたのだが、今はここに^{さだめ}いるのだった。永遠の宿命を前にした、寄る辺なき一個の人間として。

それでもなおいまだに、彼女が望んでいたほどには、追放と自由と排除を味わう身となつてはいなかった。なおいまだに、すべてこれ偶発事にすぎなかった、ということで済まされてしまう危険性があった。いまだにフォスは尋常ならざることを推測することなく、品よく椅子から立ち上がり、彼女を友人に紹介することが必要だとさえ思った。「昨夏のあなたのお友達、パウルス嬢ですよ」と。あたかも、数通の灼熱の手紙がどれも、マンハイムのあの橋上での抱擁に、ほんものだという印章を押さなかったかのようにである。ああフォスよ、その君の前にいるその男は、まだほんの今しがた、来たるべき世紀のヴェールを引っぱがすような予言をしていたのではなかったか。彼は本当にまだほんの今しがた、「もはや人間というもの存在しなくなる。この先ずっと、ずっと！」ということばを発していたのではなかったか—君の横にいるこの娘は、本当にほんの今しがた、安定したお上品な生活に嫌気がさして、あら

ゆる絆をかなぐり捨てていたのではないか—それなのに君は相変わらず、ここで進行していることに関しては、何も気づいていなかったのだ。それは、友人の方が「ゾフィー！ゾフィー！」と叫びながら両腕を高く掲げ、彼女の方は彼に突進していくと、その顔を両手に抱えて暗闇の中でその表情を読もうとし、それからその肩に顔を沈めて突如泣き出し、涙に身を揺さぶられながら、今やせいぜいただ再会できたこと、再びわがものに出来たことに感動するばかりで、他のことはもはや何も考えに及ばず、宿命も意図も、まださっきまで彼女の身内で騒ぎまくっていた大言壮語の一つすらもそうであったそんなときになっても良かった。このときそこにあったのは、涙でしか推し量ることができなかった測りがたい別れのあとに、再び男を両腕に抱きとめていた女と、火花を彼女の中に投じていた以上、今や自然法則の威力を持って彼女を引き寄せていた男、ただこれだけだった。

「出て行ってくれたまえ、君！ちょっと出て行ってくれたまえ！」啞然としてこの抱擁を眺めていたフォスは、そういう声を耳にした。相変わらずここで起こっている事態はのみ込んでいず、情熱的挨拶の仕方に驚き、たじたとになっている友の助けになってあげなくてはとむしろ思っていて、この場の光景は常軌を逸したパウルス嬢のせいにはしていたのだ。そっと外へ出ると、そこで、そういえば公使館参事官殿は事実昨年この屈託のないお女中にべろべろになってしまっているさまを、人目を憚ることなく、白日の下に晒していたものだったと思い出した。廊下を行ったり来たりしていたが、やがてこの通路の端にある窓を開けた。月が山の上にあって、その下で灼熱の光を放ちながら木星が昇ってくるのが見えた。下からは川のさらさらと流れる音が聞こえてきて、花の匂いが、どんよりしたテラスに、冷却しつつある地面が上方へ送ってよこしているかのように、立ち昇ってきた。遠くの庭園ではナイチンゲールが絶えず鳴いていた。かなりの間フォスは窓辺に立っていたが、彼が確認できたことは、もしこの友人と、おじゃんになってしまったこの晩が、自分の胸を締めつけていなかったならば、ここで待っているのも悪くはなかつただろうということだった。しばらくしてもう十分だろうと思ったので、ドアをノックして顔を

覗かせた。相変わらず両人は、彼が立ち去ったときと同じ恰好でひしと抱き合ったまま、そして泣きながらひそひそと話しているだけだった。「もう5分だ、君！」とジャン・パウルは言った。そして5分後再び目をやると、彼らは手に手を取って座っていた。作家は窓の方を向いて、ゾフィーはベッドの端に彼と並んで。ジャン・パウルは友にもうほんの5分、最後の猶予を請うた。

フォスは、ナイチンゲールや庭園や月が彼の暇つぶしになってくれるだろうなどということはほとんど取り合わず、むしろ、廊下を5分で何度、次いで10分で何度、では結局15分では何度行ったり来たりできるだろうかという好奇心の方に身を委ねた。ついに時間切れとなって、もうこれ以上は友人だから我慢してとは言わせないという固い決意をもって中へ入った、そのとき彼が見たものは、途切らすことなく静かに語りあっている二人の姿だった。木星の輝きは今やここでも窓の中へ差し込んでいて、娘の顔を照らしていた。まだ涙が流れ落ちていたが、それは嵐のあとの海のうねりのようなものに過ぎなかった。涙なぞ気にせず、もうかなり長い間、作家と穏やかに語り合っていたようにみえた。しかし作家の方は、一方の腕を—もう一方は娘の膝にあった—光の方へ向けて上方にぐっと伸ばして、穏やかにことばを続けた。

「私たちの星ですよ、ゾフィーさん、これはこれからもずっと平安をもたらしてくれる私たちの星であり続けますよ。さあ、君たち！」—ここで彼は空いていた方の手で教授の手を掴み、三つの手を重ね合わせた—「いいかね、君たち、私の友人である君たちよ、我々が地球もまたそういう星なのであるが、こちらの方が、神を思うことよりも、つまり我々を上方から照らしているこの問いかけよりも大きなものではないだろうか。我々人間は、我々が星をどうしつつあるのだろうか。」ここで彼は結構長い演説を終えたかのように話を打ち切り、少し沈黙してからフォスに、お嬢さんを家へ送ってくれるように頼んだ。自分は眠りたいと、いうわけだ。

フォスは相変わらず泣いている娘の先導役として、無言のまま通りを歩いていった。友人が彼らの手を重ね合わせてからは、この令嬢は彼にとって守るべき大事なものになっていた。彼らはまだパーティの明かりのある家へ入ってい

き、彼は、自室のドアの所までゾフィーに同行し、彼女は何も言わず中へ入っていった。それから彼は一人で、一同のいる所へ行って、みんなに取り囲まれる中、こう告げた。ジャン・パウルは、列席の方々によろしくということだったが、6マイルの今日の旅からくる疲れと衰弱に襲われて、先ほど丁度入眠したばかりだと。

「永眠されたのですか」とシュレーゲルが興奮状態で尋ねた。

「いいえ、幸いにも！入眠です。」

第四章 一日

ジャン・パウルは事実入眠していて、まる一晚の素晴らしい眠りっぷりだった。ほんの一度だけ目が覚めて、あんなことがあったあとでもこんなに熟睡できるんだと、つかの間の驚きを味わった。そしてそれが、次の日の午前中に目を覚まして、丁度まだ木星が窓越しに輝いていたばかりのところに太陽があるのを見たときの、最初の思いでもあった。彼はヴァイマルを訪れたときの、幸福のあまり眠れなかった夜のことを、鳥たちがさえずりはじめたとき、ベッドから羽が生えたように飛び出していったことを思い出し、それを、今日穏やかに目を覚ましてベッドに横たわり続けたときの、成熟した心地よさと比較した。「ゾフィー！君は女神のような娘だ！」しかしベッドの中がこんなにも素敵だったので、永遠の繰り返しである洗面行為と着衣行為に移る気には、もうほとんどならなかった。もし空腹感がなかったら—ブレーチェンとコーヒーに対する物凄い飢餓感がである—もっといつまでも横になったままでいられたことだろう。

ここでは、昨日の体験を思いっきり楽しく、またすべて思い出しながら味わい尽くすことができたのだった。彼女は彼を何と愛していたことか！両手で顔を撫でたら、ひげを剃る必要があるとわかった。朝食は部屋で取ることに決めた。身づくろいが、空きっ腹ではやつつけられない仕事のように、彼の前に立ちだかっていたからだ。誰もいない部屋にぼつんといるといのはありがた

かったのだ。起きる妻の立てるかさかさという音はない。思索と想像が静かに成長・発芽して、ことばによって中断されるということはない。ああ、心と心が至福感とともに、お互いの中に潜り込んでいけるのだ！しかしながら、沈黙の部屋には、それなりの取り柄があったのだ。彼はズボン下姿で窓辺に立っていた。窓を開けると、庭の彼方、町の屋根の彼方を望み見て、深々と息を吸った。これは憧憬の思いだろうか。いや、憧憬の思いではない。むしろ、寛いで手足を伸ばしているのだ。のほほんと成り行きに任せているのだ。消化機能がうまく働いているのを喜んでいるのだ。その嬉しい結果の前触れが都合よくあったのだ。それから、従業員が朝食を運んでくるまでは、白紙の用紙をトランクから取り出したり、文章をいくつか書き留めたりした。ちゃんと油を差した器具の動き同様、難なくである。執筆しはじめていた『自叙伝』の、牛飼い娘ユスティーネとの初恋体験に関する締めくくりの文章部分である。

その間隙を縫って、創造と生活の関係に関していささか瞑想に耽った。今はじめて創造の平安が恵み与えられて所有できているのは、生活の圧迫が背景に退いてしまっているからではないのか。もはや生活できない、また生活する気がないがゆえの創造行為。創造者というのはそもそも、非生活者ではないのか。このことについてならさまざまに言えるだろうし、またひょっとしたら、作家の生活すべてをこの思いつきをもとに築き上げることができるかもしれない。しかし次の瞬間にはこんなことを考えていた。ああ、ジャン・パウロよ、君がここで行っているこのことは、そもそも一体まだ創造行為のうちなのだろうか。ここにある文章において創造的といえるもの、これを君が創造したのは、君が自分のことばのリズムを発見したときであり、君が人生に挑み、人々に向かって波のように押し寄せていったときなのだ。そのころに、君がまだこの先君の臨終までに書くつもりでいる一切のものは出来たのであり、生のエネルギーの中でその形を手に入れたのだ。君はまだあの頃を食って生きているのだ。創造的であるのは、生活的である者だけなのだ。

ボーイがお盆を運んで来た今このとき、君は、ああいい文章を四つ書いたなど、丁度左官が、積み上げた煉瓦を一望するときのように、満足感をもって確

認したのではないのか。そしてそれを創造者の楽しみと呼ぶつもりか。君が創造者だったのは、ユスティーネの視線を求めていたあの頃なのだよ。さあ白状するがいい、今の君は、細工をしたり磨きをかけたりといったより大変な仕事の方が、あの落ち着きというものを知らない、創造者だった時代よりも、はるかに好きである、と。彼は満足感をもって、バターと蜂蜜を塗ったカリカリの白パンにかぶりついた。創造者というのは生活者のみなのだ！ひょっとしたら今はもうあまりちゃんと生活していないのかもしれない。しかしまさに今このときこそ、実を言うと、パンはおいしかったのだ。

本当に今朝、ユスティーネとか執筆過程とかが、そんなにも彼の興味を引いていたのだろうか、言い換えると、彼の思索を貫いていたのは、すべてこれ、昨日の晩というものをなしにするということだったのではなかったのか。昨日、ゾフィーが来る直前には一ヴェールに包んだ奇妙な形であったことは、もちろんだが—「君、君だけが、今これからでもまだ、私がこの神聖同盟の小説を書くことを可能にしてくれるかもしれないのです」と考えていたのだが、—今の彼の思索はすべて、この決定的な問いに対する答えの周りを巡り巡っていた。ゾフィーは彼の所へ来ていた。ああ、その来方といたら！彼の目を光の方へ向けさせていたさまといたら。どこまでも捧げ尽くす感じで、その身を彼に投げ出していたさまといたら。彼女が私から求めているのは宿命きだめといったものとその身の転落以外はないと彼が感じ取っていたさまといたら。いかなる責任も彼に課すことなく、ただ彼を愛してそして転落していく。ゾフィー・パウルスなどという仮の姿にうんざりしつつだ。カロリーネ・ベーマーが、シュレーゲルに行き着く前に、あの名もなき士官にマインツの牢獄で身を投げ出していたのと同じようにだ。

昨日あのとき、彼らの間にはある一つの瞬間が生じていたのだった。いたく曖昧で、口に出されることなくさつとよぎって行っただけであったが、それでも、思い出してみるととくに、手を伸ばせば届く所にあるかのように、いたくはっきりとしたものとなっているのだった。彼女は必ず彼に言っていたのではないのか、つまり、彼女は必ずそのことを言っていたのではないのか。彼

の耳の中ではっきりと鳴り響いていたあのことばを。ひょっとしたら前後関係から出てきただけのことかもしれないにしても、あの「私を奪^とって！私を奪^とって！」ということばを。それに彼はぎょっとなってわなわなと後ずさりし、そして彼女にカロリーネ・ペーマーのあの話をして聞かせていたのだ。彼女が牢獄で無名の男に身を任せ、その子どもを孕んだこと、その後牢獄から解き放たれると再び生きる意志に心を奪われ、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルという友を得たこと、彼は彼女を救ってくれたが不幸にしてしまったということ。彼はこの物語で何を意図していたのだろうか。この娘の荒れた気持を静めてやり、同時に、なすすべなき一瞬を狙って生贄を爪にかけ、この戦利品で身を飾った憎むべき男への反感を呼び起こそうということだったのか。そしてそのときの答えが、あの取り乱しての号泣だったというわけだ。それは、お互いもうとっくに別のことについて話をしていたときでさえ、止まってくれなかった。彼はこの瞬間、すべてをぶち壊してしまっていたのだろうか。彼はこの考えを打ち消した。否、彼は彼女を愛していたのだ。

ああ、この素晴らしき被造物よ！ 彼女は彼の目の前に、宇宙となじみ永劫の時間となじんだ姿で漂ってはいなかったか。彼女とともにあった、彼女と一緒にだった、それで彼の新たな向こう10年分の創造力が救われていたのだった。何と10年だ！彼女は彼の夢の原^{ウーア・ビルト}像^{ビルト}だった。彼女の姿のどのラインも、彼が万物の原^{ウーア・ベギン}初^{ビルト}のときから愛していなかったものはなかった。彼の運命のルーネ文字がそのなかで形となっていた像^{ビルト}、永遠に求めていた像^{ビルト}、理想像、彼の理想像^{イデアール}！それなのに彼は彼女を拉致することはしていなかったのだ。彼女が、運命の拳の一撃で、彼の所へ駆り立てられてやって来ていたというのにな。彼女は彼の中に自分がいることに気づいていて、彼は彼女の中に自分がいることに気づいていたというのにな。彼には突然、彼らが互いに、人間が互いに、防弾壁として掲げるいたずらっぽい戯れに対する疑念が生じていたのだろうか。君の背後にまだ、私が求めるようなものが何かあるのか。私の背後にまだ、君が求めるようなものが何かあるのか。愛というのは単に際限のない妄想にすぎないのか。あれは君なのか。あれは私なのか。ああ疑念よ、手足を絡ませなが

ら、これを鎮めることが出来ないのだ！ だから私は彼女をうっちゃって、永遠の出会いという軌道を行こうとしていたのだ。もちろん私は彼女を愛している。しかし私は、経験を積んだ大の男なのだ。愛の欺罔に関しては知るところがあるのだ。

ああジャン・パウルよ、それにしても君は、この愛の中の何か永遠的なものが君を求めんとしていたのだということに、ちゃんと気づかなかったのか。さにあらずして、その愛すべき些事のすべてを含めた君の生活というものが、この愛に抵抗して立ち上がったというわけだ。人は永遠の出会いという圏域にのみ生きているわけではないのだ。たくさんの脈管となって地球という大地の中に枝分かれして流れ込んでいいるのだ。おおげさな言い方をした方がいいのであれば、妻カロリーネの心痛を思い出せばいい。しかしそれはひょっとしたら、この先一生きちんとメイキングされていること間違いなしのベッドの心地よさとか、子供たちの存在とか、部屋の静けさ及び君をとらえて離さないでいる子供時代の山々や森たちを見晴らしていただけることとか、ほんのそんなことに過ぎなかったのかもしれない。何とすぐに我々は永遠の存在であることをやめて、この地上の被造物いきものになってしまい、つかの間の存在の持つ不安感を抱きながら、慣れ親しんだ像イメージにしがみつき、際限なきものに呼びかけられても、もはや聞く耳を持たなくなることだろう。そして君が今、生せいとか創造力とかに関する理論に逃げ込んだにしても、君にはちゃんとわかっていたのだ。それは単にこのために過ぎなかったのだと。自分が創造的なものに対する義務感からもう解き放たれていると感じているということ、自分はせいぜいずっと昔一杯にしていた納屋から毎日の用のためにとってこようとしているに過ぎないのだということ、そしてそれは断念ということなのだが、居心地よさがすべてあり、カリカリのプレーチェンがあり、腹もいい具合に鳴ってくれる、甘美にして心地よい断念なのだとかわかっていてということ、自分をわからせる、ただ単にこのためにすぎなかったのだと。

それでは、平穏な朝の一つにまとまった状態を、互いに対立しあうポリフォニー状態に分解していいだろうか。だが我々ときたら、さまざまな声を今や再

び一つにまとめて見事な和音を作り出して、作家の落ち着いた態度を見て喜んでいるのだ。つまり彼は、友人のフォスが入ってきたとき、彼をにこやかに迎え、元気をくれた眠りと明るくなった気分を報告に及び、紙の上に奏功した四つの文章を見せることができたのであり、彼の状態を考慮して今日のところは催し物は見合わせたが、ひょっとしたらシュヴァルツ教会顧問の所か、はたまたパウルス家及び、もし差し支えがなければ、クリュートナー男爵夫人が滞在中の、シェルファー教授の所を訪問することだけは、予定しておいた、一方明日は、昨年同様ヒルシュホルンへの船旅を、あのときほど鳴り物入りではなく、またもっと小さなグループでということになるにしても、日程に組んだということを楽しんで聞いたのだった。そしてもし、どうやってパウルス嬢を自室へ連れて行ったかというフォスの報告にはやもう、恋する女性への小さな裏切りでもって応答しなければならないということではなかったならば、万事とてもいい具合であったことだろう。すなわち、事実多少常軌を逸してはいるが、きわめて好感が持てて賢明ですらあり、前年の歓喜のときがそのおかげであるこのお女中の状態が、自分にはいささか気がかりだという、宥めの数言のことだ。それ自体はどうということもないのだが、それでもちゃんと、彼女との体験から距離を置いたことばなのである。もちろんいささか評判を落としたゾフィーに良かれと思って口にされたに過ぎないものであったが、それでもちゃんと、意図せずとも彼女に対して隔壁を築き上げるものだった。

しかしすでに昨日の晩が、そのような隔壁を築いてはいなかったか。ジャン・パウルが思っていたのは、自分とこの恋する女性の間では、問題は全部、まだ決着には至っていなかったのだし、控えめながら、ひょっとしたら彼の方から示唆されたことも、一緒に星空を見たり、我らが星に対する責任を一緒に誓いあったりすることで、またきれいに払拭されてしまったのだということだった。だがしかし、ゾフィーの方ははやすでに、どれだけより正確に状況を見通していたことか！彼女はすでに、こういう出会いをしたあと、彼女と作家の態度がこれから描くであろう細かな軌跡のすべてを、女性の持つさらに細かな本能でもってなぞっていたのだった。彼女の涙の小川が奔流となって流れ、

さらに寝ずに過ごしたその夜にも流れ続けたのはいわれの無いことではなかったのだ。彼女には、この不用意に行われた再会が、すべてに終止符を打っていたのだとわかっていた。またジャン・パウルの方も心の奥底では、同様にこの結果について承知していたのではあるまいか。彼が、「前年の詩的な、花をめぐるような愛情は、残念ながら完全に揮発してしまっており、それはまさに彼女がその性格通り、永続と繰り返しを知らないからだ」と書いたとき、たしかにそれは、ただカロリーネのためを思って、彼女に、友人が待っている間、出発する郵便馬車に間に合うようにさらさらと数行書いたに過ぎないということだった。たしかにそれは、家で不安に満ちた心で知らせを待つ女性を、ただ安心させてやろうということに過ぎなかった。しかしそれでも、このときそれは、あからさまに紙上に書かれていたのだ。もう一度、書いたことばにざっと目を通して封印すると、その手紙をホテル従業員に渡した。下でもう配達夫が待っていたからだ。

心の中ではさまざまなことが出来していた。なんととっても朝は^{ポリフォニー}多声的になりがちだった。とはいえ表向きは、気分は一つにまとまっているように見え、とてもよさそうにみえたので、フォスは、シュレーゲルの住所に宛てて謝罪のことばを少し発しておくのが当を得ていないかということ、友人に向かって持ち出してみた。全く予想外にあっさりジャン・パウルは承諾した。それ以外にもやりようがあったというのか。ひょっとしたら二匹の犬が、何日間か日が一泊一日うなりながら相並んでうろついているようなものだろうか。それに、あちらの敵の陣営では何か新しい星位が生まれつつあるということがありうるのではなかっただろうか。そしてそれは、まさに自分がそこに姿を見せることでばばらに散らすことができるのではなかったか。そんなわけで彼らは数瞬のうちに、召使を通じて「フォン・シュレーゲル教授様」のもとに来訪を告げると、「カールスベルク」で二つないしひょっとしたらもっとたくさんの部屋を占領していたシュレーゲルの応接間に腰を据えて、彼のご入来を待っていた。ナザレ派（19世紀初頭、ウイーンの宗教画革新を目指したロマン派の画家たち）の絵がいくつか壁に掛かっている、テーブルの上には、無造作にばらまかれたようにして本が置かれていた。シュレー

ゲル翻訳のカルデロン作品を含む『スペイン演劇』と、十字架の聖ヨハネ(ヨハネス・デ・クルーチェ、1542-91、スペインのカトリック神秘家)のポルトガル語からの訳詩集だった。シュレーゲルは、自分の個人的趣味の対象で身の回りを固めることを好んだ、いやそれどころか、こういう習慣を意図的に誇張していた。ジャン・パウルは一瞬、旧敵が明らかに上位に立っているということにそうなったかのように、このことにつんとやられた感じがした。スターン(スタースト)とオシアンが彼のトランクには入っていた。もし彼がそれらを読んでいたら、さっとトランクに戻していたものだ。しかしテーブルの上に置いておく方が明らかに印象的だった。「猿め！」と、だから彼は、フォスに言ったのだった。内心の抵抗である。
(第四章続く)

使用テキスト Walthar Harich: Jean Paul in Heidelberg, 1929 Berlin/Itzehoe.
注 『駒澤大学外国語論集』第7号所載の『小説・ハイデルベルクのジャン・パウル』の続きです。今回は全67頁のうち、29-47頁途中までを訳出しました(前回は7-27頁ですが、28頁はアルフレート・クビーンによるイラスト頁です。残り47頁途中から66頁までは次回となります。最終頁67頁は同じくイラスト頁)。

『駒澤大学外国語論集』第7号所載「連載第1回」部分の訂正：4頁20行目
娘羊飼い→娘牧童